

満蒙開拓とは



移民募集ポスター

満蒙開拓移民は、かつての日本統治の満州（現・中国東北部）・内蒙古（現・中国内蒙古自治区）・華北に入植した日本人移民の総称を指します

藤後博巳

地名は史実に鑑み当時のままを用い、文中の引用文献・資料は巻末に記載

試験移民

一九二七年（昭和二年）の金融恐慌と、その余燼よじんのおさまらぬうちに荒れ狂った世界恐慌は、日本の為政者の眼を改めて中国大陸——とりわけ満州の地にそそがせ、彼らは経済危機の解決を満州にたいする植民地進出の一層の強化によって計ろうと考えました。その計画は、一九三六年（昭和十一年）から一九五八年（昭和三十一年）の間に五百万人を移住させ、同時に二十年間に移民住居を百万戸建設するという膨大なものでした。

一九三一年（昭和六年）九月一日、日本陸軍満州駐屯部隊—関東軍が起こした柳条溝事件（満州事変）、中国では「九・一八事変」と呼称を口火として、日本人農業移民を実行に移し、翌一九三二年（昭和七年）三月に日本の傀儡国家—満州国（中国では偽満州国と呼称）を作り上げました。このようにして満州国ができあがると、日本の支配階級は争って満州に投資し莫大な利潤を吸い上げましたが、それとともに一方では農業移民政策にも力を入れるようになりました。

その所以は、日本の労働者にはヨーロッパ諸国のそれと違って農村の二、三男や女子の出稼ぎ型が多かったため、失業すると故郷の家に帰ってゆき、そのため農村は多数の潜在失業者をかかえて窮乏していました。したがって農村の二、三男を農業移民として満州に送り出すことは、農村問題の解決策であると同時に、資本主義の生き残り策にもつながっていたからでありました。戦争末期には戦災にあって失職した多くの商工業者等も、その対象とされ、少数ではありますが送り出されています。

第一・二次武装移民は、移民推進者の東山鉄男（関東軍将校—張作霖爆殺立案・実行者・加藤完治特異な農本主義思想家）の移民案が、一九三二年（昭和七年）八月に議会を通過し、同年十月三日に第一次移民団（四九二人・シヤムス〈佳木斯〉永豊鎮、後の弥栄村）、翌年夏の第二次移民団（四五五人・永豊鎮近くの七虎斑、後の干振村）が試験移民として入植しました。のちに〈弥栄村〉および〈干振村〉と自称したこの二つの移民村は、一九三五年（昭和十年）代にはいると、メディアから理想的な移民村と称えられ、満洲農業移民への夢をかき立てる好材料とされるに至りました。

この集団農業移民は完全な武装移民で、ソビエト（現ロシア）にたいする第一線兵力の扶植へんごという軍事的な役割を負わされていました。前出の東山・加藤をはじめとする武装移民を推し勧めた人たちは、移民の成否如何いかにが、その後の政策に大きく影響すると考え、後退はすなわち日本の対ソ国防の弱体化を意味すると懸念して全力を尽くしました。

しかし、彼らや関東軍の努力にもかかわらず、この試験移民はスムーズにはゆかず、半年の間に両団で幹部更迭騒動こうどうが起り、開拓団への不満と不安があいまって、第一次移民団から百数十人が退団・帰国しました。そればかりでなく、満洲に着いたばかりの第二次移民団に対して、「貴方たちも拓務省

に騙されて来たのか」「こんな土地で農業をできるのか」などと放言したため、数十名め退団者が出る始末でした。

反満抗日パルチザン

しかし、この二つの農業移民団事件の本当の原因は、別に存在していません。それは、当時は団員たち自身にもそれと明確には自覚されていませんでしたが、第一には、中国農民たちの抵抗・襲撃による生活と生命の危険でした。第二は、のちに屯墾病ホームシックと命名されるに至る開拓地特有の集団的ノイローゼの発生でした

一つ目の生活と生命に対する脅威の最たるものは、現地の「反満抗日パルチザン」の抵抗でした。僅か入植九カ月間で中国人（満人と蔑称）による一回にわたる襲撃にありました。日本側は、彼らを匪賊と称していましたが、その大半は民族独立運動組織としての反満パルチザンによるものでした。

治安の安定しない満州に形成された中国人社会は、古くから一種の傭兵的な自衛組織を持っていましたが、これが日本の植民地政策のもとで民族解放運動の色彩を強め、侵略の先兵としての第一次移民団に熾烈な攻撃を加えることになったのです。そして一九三四年昭和九年二月には、日本の満州移民政策を根底から動揺させた土龍山事件―北滿の関東軍重要基地だった佳木斯市に近い依蘭の大地主―謝文東が一万人の傭兵を率い、土龍山というところを根拠地として蜂起するという事件まで惹起されるに至りました。

第一次移民団の人びとは、武装移民であることを承知で満州に来た筈であり、その多くも在郷軍人でした。それゆえ、反満抗日パルチザンとの武力抗争も辞さぬ覚悟はできていたわけですが、しかし予想を越えて熾烈なパルチザンの戦意は、彼らの意気を沮喪させずにはおかなかったのです。

二つめの「屯墾病」。日本に所帯を持つ男ばかり、中国人社会とは断絶されており、娯楽と呼べるものはほとんどありませんでした。緑の山河に恵まれた日本とはまるで異質な自然環境に投げ出され、しかも、小人数だけの閉鎖社会で、四辺を見えない敵にかこまれて絶えず緊張を強いられるのですから、深刻なホームシックにとらわれるのは当然の成り行きといえます。

これ以後、政府の移民政策は、「青少年武装移民」に転換し、満蒙開拓青少年義勇軍（以下・義勇軍と呼称）へと進展していきます。

試験移民から集団移民へ

満州農業移民が「試験移民時代」一九一八年～二二年（昭和七～十年）を経て、集団移民と呼称を変え、そして大量移民の本格化へと動き出したのは、一九三七年（昭和十二年）度の第六次からでした。

この四年間の試験移民の成績は、同年七月現在のまとめでは、入植戸数一、七八五戸、その中で戦死三〇名、病死二八名、退団者四〇四名（退団率二割二

分補充者数四名、差引き合計数一、二六七名を数え、それに妻、子、その他家族が二、四一五名で、総合計は三、七八二名となっています。

これは退団率二割二分に止めたことを意味し、移民史上では好成績であると政府は評価しました。このことが大きなバネとなって移民促進世論に結びつき、試験移民から次の本格的移民計画の策定を促し、ここに五か年二万戸送出計画の立案と、現地・内地(日本本土を指す)を通じての満州拓殖株式会社(満州と満州移住協会内地)の両機関の誕生を見ます。

この移民という名称は、日中戦争の激化にともなって、満洲国の中国人にも大きな動揺をひき起こしたことに対処するため、移民問題の再検討が行われ、その過程で移民という名称は侵略的な意味をもつことから、すべて「開拓」と改称されました。以後、移民団は開拓団と呼ばれるようになります。

土地収奪―日本耕地の三・七倍

満州事変以来の満洲国の歴史は、中国人にとって屈辱の歲月でもありませんでした。そしてその中心的な部分が土地収奪だったのです。満洲開拓とは一言でいえばまさに、中国人の土地を奪うことでした。支配民族の国家権力者にとっても、土地取り上げの実態は見過ごすことのできないほど非常識で残酷なものでした。

その実態は、一九四一年(昭和十六年)春季までに、政府・満州拓殖機関を合わせた地券面積は、二百二万六千ヘクタールと膨大な土地整備に至りました。一説では、六百二〇万四千ヘクタールとも言われています。この買収面積は、当時の日本内地の耕地面積は約六百万町歩でしたから、実にその三・七倍に相当しました。

資料によりますと、一つの開拓団の入植地は七〇〇町歩から一万六町歩に達するものあり、この傾向は一般の移民団もほとんど同じでした。ちなみに一万町歩というのは一〇キロ四方の広さで、一周すると四〇キロですから、東京の山手線の内側の面積に相当します。私は一万町歩という広さが想像できませんでしたが、一〇キロ四方の広さです。

ここに僅か三〇〇人前後の開拓団員が入植したのです。しかも、その殆どの農地が未開墾地ではなく、中国人の耕地だったのです。

満州での土地取り上げが実際にどのようなやり方で、実施されたかを示す資料は極めて少なく、買上げ地価については溥儀(満州国皇帝)の『わが半生』によりますと、「日本は東北満州『拓殖移民』政策を執行するに当たって、地価の四ないし五分の一の価格で東北の農地を強制的に買収することを規定した法案を『国務会議』に承認させようとした」というもので、結局この法案は「承認」されました。しかし実際には取引価格の十分の一の値段で買収されたこともあったと伝えられています。まさに収奪に等しいものだったのです。

移民用地としての土地収奪は、最も民族的抵抗の強い問題でした。そのため、侵略の意味に通ずる「移民」という用語を「開拓」と呼び変え、移民事業も日満両国の「共同事業」に祭り上げたのです。このような政策過程の意

味するものは、「合法的」に公然と中国人の土地を、日本人名義の入植地にす
り替えることにほかなりません。そして、これは関東軍の武力を背景にした
開拓団だけがなしたことだったのです。

究極的にはこうした移民政策は、満州国の日本化政策の柱として位置づけ
られ、移民はその「先兵」でしかなかったのです。

移民のトップは長野県

一般開拓民・義勇軍送出数は第二位山形県以下の四十六府県を抜いて、圧
倒的第一位の実績を収めたのが長野県でした。中でも義勇軍にたいする政府
の募集の熱の入れようは、一般開拓団に比べて格別で、巡回映画・講演会・
ポスターなどのほか、小学校高等科生徒の担任教師らによる説得など、あら
ゆる機会と手段を駆使して進められました。

募集初年度の一九二四年(昭和十三年)は、全国で三万人に対し、五カ月の間
に採用者は一万四千八百六十三人と予期以上の応募者となり、長野県が千百
三十六人で全国一位でした。一般開拓移民は敗戦の年まで続けられ、敗戦の
年五月時点での移民数は、七九三開拓団・入植人口十九万六千八三七人に及
びました。まったく酷いことで、死に追いやったのも同然です。

しかし、二年目応募者実績は大きく下回って全国で八千八百人の送出に終
わり、政府の宣伝強化の甲斐なく、その後は下降傾向をたどっていきます。

ちなみに、中国共産党は開拓民の入植を「日本帝国主義による満州侵略の
一環」として捉え、帝国主義的な土地買収に抵抗しました。また、関東軍、
満州警察、満州国政府諸機関組織等を攪乱し、義勇軍を含む日本開拓民に手
痛い打撃を与える等、「反満抗日」路線を明確にして抵抗しました。

義勇軍設立建白書

一九三七年(昭和十二年)「義勇軍編成に関する建白書」と題された文書が
政府全閣僚に出されました。署名人はいずれもそれまで満州移民のために働
いて来た、前出の加藤完治ら民間の人たちで、政治への介入となることを恐
れたのか、軍人はその中には入っていませんでした。それは軍の関与を隠蔽
するためでした。

建白書の冒頭には、

「満州国を真に日本民族を指導者とする五族(日本・漢族・満州・朝鮮・蒙
古)の王道国家たらしめるには、わが農民を移し、以て堅実な農村を建設し、
国礎の中核とするには不可欠で、そのための最も適切なる実行方法は義勇軍
の編成のほかにはない」というものでした。

民間から出されたこの建白書に対して政府は素早く承認し、つづいて矢継
ぎ早に「満州農業移民百万戸移住計画」を立案し、その具体化にとりかかり
ました。数次にわたる協議の結果、内地訓練所(茨城県内原)と現地訓練所(満
州)を設営し、適切な精神的・技能的訓練をほどこした後、開拓地へ入植させ
るなどを決めました。

建白書の後段では

「現在我が国の人口構成の統計を見るに、満十五歳以上十八歳の農家子弟約大納百五十万、その内郷土を離れて他に職を求むるのやむなきもの大納七十万を算す。これ等青少年の過度なる都市集中が、あるいは多数の失業群を発生し、あるいは国民体質の低下を誘致し、あるいは各種社会問題、思想問題の因となる等、国家民族の将来に如何に大なる疾患もたらさずべきやは、我等の憂慮に堪えざる所なり。近時軍需工場賑盛を極め、多数の青少年を吸収しつつあるも、なお幾多の青少年は農村に待機しつつあるのみならず。就職年齢（満十五歳）に達しては、離村すべきものに約二十万を算す。ここに義勇軍編成の事を掲げて、希望に満ちたる生活の門戸を開き、最も有意義なる銃後報国の方途を策すにおいては、全国の子弟は翕然（きゆうぜん・集まり合う様子）これに應じて起ち、父兄亦、欣然（きんぜん・喜ぶ様子）これを賛するを疑わず。現にこの企図を伝え聞ける地方において、鶴首（かくしゅ）その実行を待望しつつあるの事實は、これを証して余りあるべし。

要するに青少年義勇軍の挙たるや、現下の大勢これが即行の要を告ぐること洵（まこと）に急なるものあり。現地（満州）においては、すでにこれを仰ぐべき万端の用意あり。国内においては巨万の子弟農村に待機せり。冀くば（願い）これを国策としてこれを探り、即時断行、もって日滿両国の根柢を不動ならしめ、東洋平和を確立せられんことを。敢えて非礼を顧みず、右慎みて建白す」と明記されています。

この意図のもとに、「満州青年移民実施要項」なるものが決定し、さらに「義勇軍募集要項」を作って、ただちに募集に着手し、本格的な募集が展開されていきます。

義勇軍募集要綱

前文では、「わが純真な青少年諸君が満州に渡り大陸の新天地で農業を通じて心身の鍛錬を励み、成長してからは満蒙開拓の中堅人物となることは小さく見れば青少年諸君の身を立てる為でもあり、大きく見れば我が国とその兄弟である満州国との双方の発展に役たち、ひいては東洋平和の礎を築くことになるのであってこれこそ男子として大きなよろこびでもあるでしょう」と記載されています。

応募資格については、数え年十六歳（早生れは十五歳）から十九歳までの者とされ、学歴・経歴については「尋常小学校を修了した者」であれば「職歴はその如何を問わない」といたって緩やかものでした。

このように、日本政府の鳴り物入りで進められた徴募活動で応募者が殺到し、短期間で約六千五百名という盛況ぶりでした。ちなみに、この募集は敗戦直前の六月までつづけられ、敗戦年には三千四九千五百名もの若者が満州へ送られました。

そもそも私がこの義勇軍に志願した動機は、学校・家の周辺到るところで

張り出された募集ポスターの広い大陸の新天地と片手に銃、片手に鍬という勇ましい少年の凛々しい姿に憧れ、満洲に行く以外に自分の幸福になれる道はないと信じ、担当教師からの「満洲国の人たちと仲良くし、立派な国を創るために、日本の青少年が必要」と説得され、家に来てまでの執拗な勧誘が、志願のきっかけだったと思っています。

当時、父母や身内の思いはいったいどうであったのでしょうか。これは私の帰国後、父親から聞いたことですが、決断したその決め手は教師が置いていった「満蒙開拓青少年義勇軍募集要項」というチラシの中の「郷里出発の際は、別項の携帯品を必要するも、その後独立の農家になるまで数年間に要する経費は、父兄等の仕送りを必要としない」という殺し文句だったと、當時を回顧していました。

一方、級友たちの反応は記憶には残っていませんが、こうした当局の熱心な勧誘にもかかわらず、同窓生からは私以外に一名の参加という結果が、如実に物語っています。

私たち二人が街を出るときは、学校の校庭で、さながら出征兵士でも送り出すかのような町を挙げて壮行会をしてくれました。

苛酷な訓練

私たちは、一九四二年(昭和十八年)三月、茨城県東茨城郡下中妻村にあった内原訓練所に入所しました。ここで大阪から集められた十四、五歳の少年たちで中隊が編成され、上田讓中隊長の名を冠して「上田中隊」が生まれました。その数は隊員、幹部併せて二百五十余人でした。

内原訓練所の所長は、前出の加藤完治でした。前にも少し触れていますが、彼は昭和十二年、「義勇軍編成に関する建白書」を複数の有志らと起草して国会に提出し、政府の支持予算を取ると、「王道楽土」「五族協和」などのスロークَانَを掲げ、純真無垢な少年を募りました。そして「背には銃を手には鍬を」と唱え、義勇軍を組織して満洲に送り込んだのです。

満洲へ行く以外に自分の幸せはないと信じて義勇軍に志願して来たものの、非情な禁欲主義、克己主義を要求する訓練所の生活と教育は、少年たちに心情的飢餓感を覚えさせ、家郷を慕わずにはおきませんでした。

少年たちにとっては、駆け足・剣道・銃剣術・農作業・炊事当番などで多忙な日中は、ものを感じたり考えたりしている余裕もありませんでしたが、夜になって宿舎に横たわると、故郷の山河や父母兄弟たちが思い出され、涙を流しました。私もその一人でした。

これは帰国してわかったことですが、前出の私と一緒に渡満した友は、厳しい現地での訓練に耐えきれないで脱走し、敗戦後はヒロポン中毒に侵され、果ては自殺しています。

万事が軍隊式

話が前後しますが、では内原訓練所の生活は、いったいどうだったのです

ようか。詳しくその事例を挙げますと枚挙にいとまがありませんが、一言で言いますと、「万事が軍隊式」で、行動のすべての合図は、ラッパで始まるというものでした。そして苛酷な生活に耐えつる人間の訓練・育成でした。なかでも、少年たちを一番に苦しめたのは粗悪な食事でした。これは義勇軍(渡満後は満洲開拓青年隊に改称を象徴する事柄でもありました。これは内地・現地訓練所とも共通した事柄でした。

耐久訓練所とも言われるその実質は、渡満してからもさらに酷くなり、徹底して粗衣、粗食、粗住でした。それは文字通りの「極限に近い困苦欠乏」だったのです。

とりわけ食事の量が足りず、しかも質が悪かったことが、訓練生の最大の苦痛でした。知能も肉体も伸び盛りの少年にとって、空腹感は決して馴れてしまうものではなかったのです。

私が義勇軍に参加した頃(昭和十八年)の日本はすでに米など一〇品目の切符が実施され、大都市では米穀ベシユクの配給制が実施されていました。そうした情勢でしたから、義勇軍での食事量の不足や劣悪さは戦時下での食料事情のせいでと考えていました。ところが、その原因は全く別にあることがわかり、愕然としました。それはいわば政策としてとられていたものであり、方針として強行されていたものなのでした。つまり移民である日本人の胃袋を、植民地の住民なみに作りかえることにあったのです。

とくに関東軍にとっては、満州国を植民地的に支配していくためには移民を定着、土着させることは至上の課題でした。そのために、移民の生活費を現地住民並に抑え込むということなど、何の痛痒ツツキも感じなかったということです。

日本軍国主義は戦争では、外国人を虫けらのように扱っていましたが、それは日本人である移民に対しても、全く同じだったのです。

移民の生活水準を現住民の水準まで引き下げる、ということが政策的なものであった以上、訓練生の食事が劣悪だったことは、いわば宿命的なものであります。

一汁一菜の食事

内原訓練所での食事は、普段は米麦混合飯に一菜でしたが、渡満してから困らないようにとの配慮から、大豆・小麦・高粱(コーリヤン)など現地材料だけで調理した食事が多かった。例えば、満州式のマントー(饅頭・中国式蒸しパン)・豆もやし・豆乳・パン・ビスケットなどといったものでした。

ところが主食の飯は、米七割・麦三割のはずなのに麦ばかりがむやみに多かったばかりか、ある中隊ではしばしば大根飯(大根を七、八ミリ角に刻んで、それを七分にあと三分の米を足したものが出されました。また、名物といわれた饅頭とて、小麦粉に少量の砂糖と重曹を加えて蒸したもので、餡(あん)も何も入っているわけではなく、到底うまいといえる代物(しろもの)ではありませんでした。

しかも、それよりもっと少年たちが困ったのは、その分量がきわめて少ないことでした

「食事は訓練生も職員も同様に、一碗一汁の簡易なものであるが、主食は米、麦で、入所後の一週間が九分搗き、次の一週間は七分搗き、ついで五分搗きとし、満州式のマントー(饅頭・中国式蒸しパン)を時々混ぜるといふ具合で、粗食に耐え得るよう指導していた」(「満州開拓史」)。このように粗食に耐え抜くことが訓練の根本におかれていました。

非人間的な宿舎

宿舎は太陽を型取った「日輪兵舎」と称し、蒙古のゲルのように丸く、少年一人当たりのスペースは畳一枚ほどで、鶏舎の鶏のように詰め込まれて、フライバシーを持つことを許されぬものでした。まことに非人間的な建物であったといわなくてはなりませんでした。満州への兵農植民を強行しようとする為政者は、貧農の家の二、三男など人間とすら思ってもいませんでしたので、少年たちを非人間的な日輪兵舎に詰め込んだのではあったのでしょうか。

隊員たちを一番苦しめたのは、不衛生で、初めて経験するシラミやダニにやられて疥癬かいせんを患い、硫黄風呂いおうぶろの治療を受けるハメに追いやられたことです。私もその一人で、その痒さはひどいものでした。

つぎに衣生活は、服装は自由を許されず、陸軍の兵士に似た褐黄色(かきいろ)の制服・制帽を着用。下着類は支給されましたが、こちらは私品も許されていたためか、衣服に関しては隊員からの不満は聞かれませんでした。帽子には桜の紋章が施され、桜の模様は義勇軍のシンボルでもありました。

内原訓練所

内原訓練所に入所したころの私の大阪―郷土中隊は二五〇余名でしたが、一年余りの訓練期間中に脱走・脱落・病気等で一九七名まで減っていました。敗戦一年半前の昭和十九年二月二十一日、上田中隊長率いるこれら少年たちは、満州に向けて出発します。途中、皇居遥拝すまいるみ・伊勢神宮参拝を経て、立ち寄った大阪では、府庁前で盛大な壮行式を受け、家族との面会も許されました。そのとき、それから十一年を経て、よもや再会できるとは想像だにしておりませんでした。別れを惜しんで、私たちは下関に向いました。

二十四日夕刻、下関―釜山の連絡船「金剛丸」で釜山港へ。普段でしたら釜山港まで数時間の航路も、米潜水艦がうようよしているとのことで、蛇行を繰り返して、十数時間を要して、やっと目的地に着くといった有様でした。これは私が初めて危険に晒されたことを意味し、その後、私は幾多の生死を分ける体験を余儀なくされていきます。

翌未明、上陸した釜山の美しい街並みが印象でしたが、北上する列車の車窓からは、山々のすべて禿山はげであり、河川の氾濫した跡があり、冬とはいえ緑がないのには驚きました。一方、農村風景と言えば寒々としていて、荒廃

そのものだった。実に痛ましく、大陸の荒涼とした一端を垣間見る思いでした。

朝鮮最北端の新義州駅からは、満鉄満州鉄道に乗り換えて、いよいよ満洲だという万感胸に迫るものがありました。しかし、広漠千里を予想していた私は、車窓から見る風景が、余りにも日本の山間部に似ていて、実感が湧きませんでした。列車が奉天(現長春)に近づくころには、広々とした大地が見られ、とうとう満州に來たという実感が湧いて興奮しました。

現地訓練所

満州に渡った義勇軍は、この名前は日本国内限りであって、現地のかつての満州で使用されませんでした。なぜならば、日本の少年たちが兵士とほとんど変わらぬ制服で〈義勇軍〉の旗を高くかかげて上陸して来ると、中国人たちの間には〈軍〉という文字があるからには正真正銘の軍隊であるに違いないという理解が生まれませんでした。これを知った関東軍から、「軍と呼ぶのは適当を欠く」と申し入れがあり、そこで当時の拓務省と満州移民協会では、満州国においては〈隊〉の文字を使うことにしたのです。

したがって、少年たちが日本を出発するときには勇壮な〈義勇軍〉であったものが、満州に渡ると、〈満州開拓青年義勇隊〉という平凡な名に変わっていました。義勇軍に入った少年たちの大半は、満州に行けば地主になれるという現実的な願望とともに、ヒロイックな〈義勇軍〉の名に憧れて志願したのですから、為政者たちは少年たちの憧憬をも完全に裏切ったのです。

満州の現地訓練所のほとんどがソ(現ロシア)満国境一帯に布置し、最盛時には全満州で九四カ所に及びましたが、以後、義勇隊開拓団への移行が進んだので八十一カ所に減りました。これは全て関東軍の指示によるものでした。

義勇隊は、まさに『片手に銃 片手に鋏』でもって国境守備に当たらせる関東軍の予備軍だったのでした。

大阪府下の開拓民送出実態

大阪府下における具体的な満洲移民の実態について詳細には把握できていませんが、私が収取した資料から、記述させてもらいます。

大阪府においても官民一致の勧奨により、府・市の職業開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍〈満洲開拓青年義勇隊〉はじめ、その他併せて四千六百人が満洲の地に送り出されています。

大阪府はそのために現在の寝屋川市の私市に「興亜拓殖訓練道場」(現大阪市立大学理学部付属植物園を造って職業と軍事の訓練を施しました。日本敗戦の昭和二十年一月から二月にかけては、四回に分けて約六百人(市内三百、市外三百)の高等小学校(国民学校に改称卒業予定者を当道場に集めて訓練を実施しました。これは大阪府当局が、国の「大派遣計画の一端を引き受ける」意気込みで、大阪市が計画したものでした。

その思惑は、それまで他府県と比べて遜色があつた送出数を一気に挽回し、「大陸に大阪村を建設する」目的をもって、初めて大阪市が本格的に取り組んだ「拓務訓練」でした。

初回には百十二人が応募し、その内一一九人が合格し、こうして大阪府の郷土中隊は、大阪市が初めて本格的、集団的に行つた拓務訓練修了者を中心に誕生しました。

ちなみに大阪市各区の送出学校〈国民学校高等科〉は、資料では(港区)清水平国民学校・(東成区)阪東国民学校・(旭区)高殿国民学校・(東成区)西今里国民学校・(福島区)八阪国民学校〈私の出身校〉しかわかつていません。

大阪府の郷土義勇隊開拓団・義勇軍、一般開拓団の構築は次の通りです。

●第四次 小呼蘭義勇隊開拓団(相原中隊) 百五十五名

渡 満―昭和十六年六月

訓練所名―鉄驪

入 植 地―昭和十九年六月

入 植 地―北安省慶安県

●第五次 頭道義勇隊開拓団(中沢中隊) 二百六十一名

渡 満―昭和十七年六月

訓練所名―泥秋

入 植 地―昭和二十六年

入 植 地―東安省宝清県

●第六次 満洲開拓青年義勇隊(上田中隊) 百九十九名

※私の出身中隊

渡 満―昭和十九年二月

訓練所名―勃利

●第七次 満洲開拓青年義勇隊(橋本中隊) 二百二名

渡 満―昭和十九年五月

訓練所名―対店

●第八次 青溝子開拓団

●第十次 仏立開拓団

●第十次 上興発大阪開拓団

●第十二次 昇平開拓団

〈全国拓友協議会「昭和五十年」による〉

ちなみに、大阪の送出数は開拓団二千三十人―全国比〇・九%、順位四五。義勇軍二千二十五人―全国比二・一%、順位四四となっており、両者とも最下位の愛知につづく低さで、どうやら大阪では満州行は、不人気だったようです。資料ではこの他に四四五人となっていますが、詳細は把握できません。送出総数は四千六百人。

開拓者たちの終焉

しかし、この人たちはソ連（現ロシア）の参戦で頼りとしていた関東軍に見棄てられて、ほとんどが国境地帯に取り残され、そして地獄の逃避行を体験させられることとなります。しかも日本に引き揚げの途中で多くの死者・行方不明者、収容所での感染症による病死者を出しました。開拓関係の人たちは、「近代日本」の方策のツケをまるで集中砲火のように浴びてしまったのです。

一般開拓団・義勇軍約二七万人中、祖国に帰った人たちは、一九五二年（昭和二十八年）三月現在で一四万九千人に過ぎませんでした。これは十万人の死者が推定される数字です。なお、大阪の犠牲者総数は千六百人と記録されています。

義勇軍関係では、約八万七千人の内、死亡・行方不明者は約二万四千二百人（四人に一人の割合）の犠牲者を出しています。極端な事例として、敗戦年渡満の某中隊一八〇人が三〇人に激減。さらにソ連軍または暴徒の襲撃にあつて殺戮・自殺を余儀なくされて千人以上の自殺者を出した開拓団は一〇〇以上を数え、難民生活中の満州での開拓団人口の約三〇%が死亡したものとみられています。

大阪出身の義勇軍死亡者総数は把握できていませんが、私が所属する上田中隊は、敗戦前後に、幹部と其の家族を含めた約二百人の内、1-4が死亡しています。私はその生き残りの一人だったので。

一方侵攻してきたソ連軍に捕えられた関東軍兵士・義勇軍隊員・民間人は、俗にいわれているシベリア抑留者となり、強制労働を強いられて極悪な環境の中で多くの犠牲者を出したことは周知の事実です。そのとき私は、ソ連軍によって牡丹江捕虜収容所に収容されていましたが、未成年ということでの難は免れたものの、罷り間違えば私もこの災難にあっていたと思うと、やるせない気持ちは未だに拭いさることはできません。

敗戦の年の冬、私が一時収容されたハルビン市内の花園難民収容所（元花園小学校）を思い出します。ここはハルビン市内に三百力所はあったという難民収容所の中でも最も多くの日本人難民が生命を落とした場所でした。その惨状は、財団法人満蒙同胞援護会の記録によりますと、敗戦から翌年にかけての冬に、奥地から苛酷な逃避行を経てハルビン市の収容所に入った難民たちは、八万八千人に達しました。このうち、凍死、栄養失調死や、発疹チフスで、越冬中に一万二千人が死亡しました。私の眼の奥には、講堂を隙間なく埋めて横たわり、よろばふ人たちや、骨と皮だけの幼児や、校庭に積まれた死者たちの凍死体が焼き付いています。幸運にも斃れなかった人たちは、死と隣り合わせの日々を生きていたのです。

加害者にして被害者

一般開拓団や義勇軍を問わず、満州在住の一般日本人は一方的に被害者だった点にあるのでもなければ、一方的に加害者だった点にあるのでもなく、その悲劇の本質は、彼らが加害者であると同時に被害者でもあり、さらに言

えば「加害者にして被害者」になかば強制的に仕立て上げられところにあつたと言えます。

とりわけ、義勇軍の少年たちは自由に選んで義勇軍に参加したわけではなく、その大半が貧しい農家や都会の二、三男であり、村にいて作男や労働者、軍属、または少年兵になるかの選択肢しかなかったのです。

近代日本国家は、力の弱い者の犠牲の上にその権力を築き上げ、且つ保持してきました。義勇軍も一般開拓団も、日本の国家がその権力をいよいよ強化するために、これらの人たちに強いた「犠牲政策」に他ありません。

日本国家が、このような観念を払拭ハキしない限り、今後も繰り返されないといい保障はありません。過去にあったこのようなことを再び招来させぬために、私たちの負うべき責任はなかなか重いと云わなくてはならないのでないかと……。

後記

私の人生を振り返って見るに、義勇軍・義勇隊生活はたったの二年四か月で、うち満州で生活を体験したのは一年四か月程度でした。そして小学校高等科二年の卒業式を待たずに義勇軍に加わりました。そのころは満十四歳のまだ右も左もよくわからない少年でしたから、無我夢中で軍国少年の夢を追ったということでした。

それからすでに七十三年の歳月を経ましたが、その生活の数コマは、今でも私の心の底にある鮮明さを残して、深く沈潜しています。

満州開拓移民事業は、満州国の発足に呼応するかの如く出現し、日本の敗戦によって壊滅し、共に悲劇的な結末を迎えました

一般開拓団および義勇軍は侵略の手先だとして、指弾を浴び、冷ややかな視線にさらされたのが、その「満州帰り」でした。その口惜しさ、無念さは当事者でなければわかりません。私はその一人として苦渋の生活を余儀なくされました。

しかし、何よりも今大事なことは、満州で辿った私の足跡を、とりわけ若いひとたちに語り継ぐことが、後の世の生きる人たちへの歴史のメッセージであると痛感しています。

満蒙開拓は、そういった意味で私の自分史の一部であり、避けられない事柄だったのです。

満蒙開拓の基幹となったのは義勇軍でした。したがって、本文は義勇軍(義勇隊を中心に、私なりにまとめてみました。しかし、詳細にわたって記述するには余りにも膨大過ぎ、不十分さは否めません。記述の内容が前後することがあり、読みづらい点もご容赦ください。

二〇一七年一月一八日記

(日本中国友好協会大阪府連合会顧問)

【引用文献・資料】（以下、記して感謝を捧げます）

吉野年雄『誰も書かなかった義勇軍』光陽出版社、二〇〇七年
日高光利『草原に、我等の火は燃えた―満州開拓民史再考―』（有）ファクター

平成十八年

上笹一郎『満州開拓青少年義勇軍』中公新書三一五 昭和五六年

坂本瀧彦『満州難民 祖国ありや』岩波書店、一九九五年

大阪府開拓民自興会機関紙『大地』部内資料 二〇一六年

上田中隊編集委員会『上田中隊―敗戦前後の逃避行』部内資料 一九五八年

角田房子『墓標なき八万の死者 満蒙開拓団の壊滅』中公文庫、昭和五一年

小川津根子『祖国よ「中国残留婦人」の半世紀』岩波新書、一九五五年

井出孫六『中国残留邦人』岩波文書、二〇〇八年

古川万太郎『中国残留日本兵の記録』同時代ライブラリー、一九九四年